



畑につながる道の改善前(2005年5月。写真左)と、「やんばる方式」で改善された同場所(2006年3月。写真右)



「やんばる方式」で改善された畑で収穫されたジャガイモ(下)は、周辺の畑のそれ(上)よりずっと大きかった



鳥袋さんたちは、祠のある参道に炭とチップを敷き、枯れかけた山を生き生きとよみがえらせることもやった



自分の畑や周辺のやんばるの森の再生をはじめた鳥袋太さん

の畑に植えたジャガイモは周りの畑の三倍以上の大きさがあつた。ずっとやんばるの森とともに過ごしてきた鳥袋さんも、自分の畑で実践して、またやんばるの森を見て、その成果・結果に驚いている。

多くの実績はある。あとは、このやんばるの方式をどのように進めていくかだ。冒頭にもいったように、やんばるの森の再生となると、これは公共事業になる。

「これまでの公共工事の仕組みを変えないといけませんね。公共工事もだれがやっても同じやり方ではなく、人によって工事は変わるということを前提とした工事をやらないとだめではないかと、最近思うのです。生態系に対して、みんなは気をつけているとは思いますが、実際的には図面だけでやっているというのが実状でありこのようなあり方は、もう限界にきているのではないかと、上里さんはいう。

緑が濃くなる、山が生き生きしてくる。上

里さんをはじめに、行政側にも、そうした実績を目の当たりに見て、周辺の農地のあり方、ダムや林道の開発といった人間活動を含めて山を生態系のサイクルの中で捉える「目」を持った人が多くなってきた。

「もうひとつは、太(鳥袋さん)が“人だ、人だ!”とっています。これも非常に大事なことで、こうした公共工事で多くの人にこの工法にあたってもらうということです。うまくいか、失敗するかはわからない。ただ失敗したときに、そこでなぜだめなんだろう、とそこから自分のやり方を考えていこうな人、こういう人材が必要だろうと思います。そういう人たちが、ひとりでも多く育ってほしい。資質をもっている人はこの辺りにはいっぱいいると思いますから、そうした人たちが増えていけば、変わってくると思うのです」。

それと、変わらなければならないのは、この3人の取り組みを支える学問体系だ。生態学者の高橋正征(高知大学大学院、東京大

学名誉)教授はいう。

「自然の真理を追究する理学と、人間活動を中心に考える実学が、それぞれの世界で進み、しかも限らない細分化の迷路へと入り込みつつある」(「新しい生態学、高橋正征著)。そこで提案されているのが、純粋に生物学から発展した生態学に、「ヒト」の活動も組み入れた「新しい」生態学である。

このはじまったばかりのやんばるの森の再生事業は、そんな「新しい」生態学の実践とでもいい。生態学のみならず、このプロジェクトは、やがて、土壌学や植物学、森林学……、さまざまな専門学問が導入され、それらが統合され、さらには日本の公共事業のあり方を変え、全国、いやアジア諸国など世界中に広がっていくように思う。(文責:編集部)